

弥生時代から古墳時代の生活

ひとの暮らしで、大切な「衣・食・住」。中でも、「食」は欠かせないものです。この時代の「食」に関する土器で、食事づくりに使う甕を中心に紹介します。

弥生時代

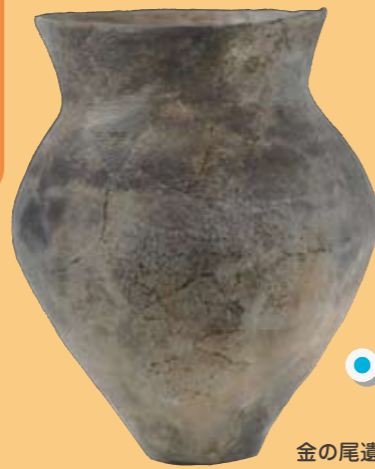
食事は、家の中の「炉」で作られます。この時代の初めから中頃までは①のような甕を使います。その後、使い易さを追求して、②のような「台」の付いた形に変わります。

弥生時代後期の土器



金の尾遺跡

● 煮炊きの変化 炉～カマドへ



金の尾遺跡

① 甕

炉に、直接置くため、土器の側面から熱が伝わる形です。



② 台付甕

甕の底に台をつけることで、底全体に熱が伝わりやすくなりました。



十五所遺跡

● 土器の形の変化

つぼ 壺



十五所遺跡

貯蔵する土器



壺は粉や種などの保存のために使いました。

たかつき 高杯



金の尾遺跡

盛りつける土器



食事を盛ったり、マツリの時に使います。

こしき 甑



金の尾遺跡



甑底面

蒸し器として使う土器

甕でお湯を沸かし、その上に甑をのせ食べ物を蒸します。



古墳時代

この時代の初め頃は、「炉」を使い、火の中に直接甕を置いて調理します。しかし、甕自体は③のように、熱効率が良くなるように改良されます。この時代の中頃から、家の中に「炉」に代わって「カマド」が作られます。「カマド」によって、甕の形も④のように変わりました。

古墳時代前期の土器



大塚遺跡

古墳時代後期の土器



口縁部拡大

③ 台付甕

土器の厚さが薄くなり、さらに熱効率が良くなります。縁の断面がアルファベットのSの形をしているのが特徴です



西田遺跡



カマド

④ 長胴甕

朝鮮半島から伝わったカマドの構造にあわせ形が変わりました。



二之宮遺跡

つき 坏



姥塚遺跡

一人一人用の食器です。古墳時代中頃から須恵器が出現します。



姥塚遺跡



大塚遺跡



大塚遺跡



二之宮遺跡



二之宮遺跡



甑底面

取っ手付もあります。食べ物が落ちないように中に簀子をはめます。

